
トトリのアトリエ ～トトリと宿命の担い手～

柳也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トトリのアトリエ ～トトリと宿命の担い手～

【Nコード】

N 6 6 5 4 V

【作者名】

柳也

【あらすじ】

漂流してアランヤ村に流れ着いた少年、アレアス。

アレアスを助けた少女、トトリことトトウーリア・ヘルモルト。

二人が出会う事により、宿命の道は緩やかに確かに生み出され続ける。

その結末は——きっと

第一話

お使いの最中。家の煙突から黒煙が立ち上っているのが見えた。

丘の天辺てっぺんにあるヘルモルト家は、アランヤ村のどこに居ても見える。大事があつたなら村人たちも急いで駆けつけてくれるだろう。

しかし。周りの者たちは揃って「またか…」とでも言いたげな苦笑を浮かべていた。

少年も例外ではない。

この光景は一年ほど前から、すっかり見慣れた光景なのだ。

「まあたあの嬢ちゃんがしくじったか？」

「ああ……そうだろうな」

また掃除しなければならぬ事を考えると頭痛がする。

米神を抑えている少年を見て、店主は気前の良い笑顔で笑った。

「ま、お前さんがあの嬢ちゃんを助けてやりな。助けられた恩義があるんだろう？ こいつをまけてやるからよ」

一瞥しただけで新鮮だとわかる“シャリオミルク”。これだけの品質ならかなりの値が付けられるだろう。

「……ありがたく貰う」

本人がくれると言っているのに聞き返すのは失礼だ。できるだけ感謝を込めて言う。

「おう！ 頑張ってきな！」

失敗して落ち込む少女を慰める意味か、掃除を頑張るという意味か、判断に困る応援を背に帰路へ足を運ぶ。

ここ、アランヤ村は“アーランド共和国”の首都アーランドから南西にある漁村だ。

村の規模はそれ程でもないが、落ち着いた雰囲気と人々の良さに溢れていて、住み心地は悪くない。

——さて。名乗り遅れたが、俺の名前は“アレアス”。ファミリーネームはない。

三年前。記憶喪失状態で流れてきたところ、この村に漂着した。唯一覚えていたのは、この“アレアス”という名前のみだ。

助けられた少年は、そのまま少年を助けたヘルモルト家に世話になり……一応、“アレアス・ヘルモルト”が俺の名となっているわけだが……釈然としないので名乗った事はない。

で、俺は当然居候の身の上だ。いつまでも世話になっているわけ

にもいかない。

今は俗に言う“なんでも屋”のような仕事をしている。手に少しでも経験が付けられたなら、それだけでも儲け物だからな。

なんでも屋の仕事内容は至って明快。言われた仕事をなんでもやるのだ。

店番、掃除、洗濯、子守、料理、漁の手伝い、釣り……まあ、仕事内容が微妙なのは認めよう。俺も最初はそう思った。

——が、これの一つ一つがまたやってみると悪くない。特に料理は、苦勞して作ったものを美味しいと褒められるのは嬉しいものだ。

それに……む……？

ダイニングへ繋がる扉の隣。アトリエに繋がる扉が開け放たれ、逃げるように飛び出してきた少女が、さながら悪魔の進行を食い止めんとするように扉を閉めて一息ついた。

「……トトリ」

この少女こそ、村唯一の怪奇原因であり、大陸に三人しか居ないとされる錬金術士の卵。トトウーリア・ヘルモルト。

姉の方はツエツイーリア・ヘルモルトと言うのだが、姉妹して長

つたらしくて言いにくいと村人たちに言われ、妹は“トトリ”姉の方は“ツエツイ”で落ち着いている。

呼ばれたトトリは煤で汚れたあどけない顔に笑顔を浮かべた。

「アレアスくん……おかえりなさい」

「ああ。ただいま」

歩み寄って荷物を地面におろすと、ポケットから取り出したハンカチで顔を拭く。

「うわ、痛いっ！ 痛いよっ！？ もつと優しく……」

抗議なんて聞いてやるわけがない。現在おそらく失敗の尻拭いをさせられているであろうツエツイを思えば当然の罰だ。

「また失敗か？」

「ち、違うよ！ 勝手に爆発したんだよ！」

「ほうほう……トトリの失敗は人外の域まで達したか。上達したな、おめでとう」

「うー……褒められてないのはわかってるんだからね！」

「褒めたことなんて一度でもあったか？」

意地悪く尋ねると頬を膨らませて顔を逸らされた。どうやら機嫌を完全に損なったようだ。

「すまない、悪かった。少し言い過ぎたよ」

「じゃあ…手伝って」

「ん？」

「調査の材料採りに行くから、アレアスくんついて来て。今日、仕事ないのは知ってるから」

さらつと天使の笑顔で釘を刺される。仕事にばかりかまけてこの所はトトリと会話する時間が目に見えて減っていた。もしかしたらそれが原因なのかもしれない。

「わかった。じゃあせめて荷物^{これ}を置いてからな」

返事にならなくて、見ている方が幸せになる笑顔を浮かべてくれた。

村の近場にある森。ここは出没する魔物も殆ど居ないし、昔から遊び場に使っていたので安心できる。

「なにを探せばいいんだ？」

木漏れ日を背に、トトリへ尋ねた。

「“マジックグラス”が何個か欲しいかも。そろそろジーノくんに渡す“ヒーリングサルヴ”も無くなってちゃったし……」

「わかった。トトリはあんまり離れるなよ？ 怪我なんてさせたら俺がツェツイに怒られる」

「うん！」

元氣よく頷くトトリ。さっそく“マジックグラス”の採取を始めていた。

“マジックグラス”というのは、薬草だ。様々な薬の材料から薬味を出すための調味料まで、幅広く重宝されている。

多めに採れたとしても好都合だ。

アレアスもトトリに倣って薬草マジックグラスを探し始める。

十分経過した。トトリのほうを見る。

真剣な表情で採取が続けている。他の事は目にすら入っていないみたいだ。

集中力は大したものだが、徐々に位置が離れている。一時間も目を離したら本人も気づかないうちに遠くへと行ってしまっただろう。

（まったく……注意のし甲斐がない）

採取を一旦切り上げて、近場に陣取る。最初の位置に比べて雑草ばかりの場所だ。“マジックグラス”も中々採取出来ない。

………これは………またも拗ねられる覚悟をしたほうが良さそうだ。

「え……アレアスくん……これだけ？」

「返す言葉もない」

持ち寄った量は、圧倒的にトトリが多かった。

理由らしい理由ならあるのだが、本人にそれを告げたところでヤブヘビになり兼ねないし、結局のところ言い訳でしかない。

「すまないな」

少し不満そうにしているトトリの頭を撫でる。

「もーっ！ 子供扱いしないでよっ！」

「おっと……すまないな」

肩で可愛く威嚇してくる少女に苦笑しながら後ろに目を向けた。肌で感じる視線。草木の揺れる音に混じった違和感のある音。

携帯して腰から下げている剣を抜く。目配してトトリを背中に隠す。

「ももも……モンスター……？」

「さがってる」

伊達に“なんでも屋”をしていた訳じゃない。魔物退治も少なからず引き受けた事があった。

茂みから現れたのは、ゼリー状の生き物達だ。名を“ぷにぷに”
といい、下級の魔物だ。当然、あんまり強くはない。

その中でも最も弱いとされる外見も青い、“青ぷに”など子供が
ガチで殴りあっても勝てるような弱さだ。

「――ふっ！」

独特の声を上げて雪崩のように襲ってくるぷに。剣を右手に構え、
横薙ぎに切り伏せた。

両断されたぷに達が個を形成できず、液体化して降ってくる。

顔にだけは当たらないよう躲し、残った一匹を突き刺した。茂み
からの新手も予想していたが、どうやらその心配はないようだ。

溶け落ちるぷにから剣を抜き、剣身に付着したゼリーを飛ばす。

「アレアスくん、大丈夫！ 怪我してない！？」

「もちろんだ」

安心したように笑う。手には護身用に先生が渡したという“錬金
術士の杖”を持っていた。いざとなれば戦いに加わる覚悟だったの
だろう。頼もしい限りだ。

「…しかし、まさか村の近郊でモンスターと遭遇するなんて…」

この近辺は魔物が出現する事が比較的少ない。ましてや襲われそ
うになるまで接近に気付かないなど、情けない限りだ。

「……なにをしてるんだ？」

トトリは青ぷにのゼリーを手で掬って瓶に詰めていた。

「持って帰ろうと思って……」

「それはわかるが…まさか、錬金術の材料になるのか？」

「うん、先生もよくモンスターの素材とか使ってたみたいだし」

「便利なものだ」

村に帰ると日も落ちていた。あれからモンスターが襲ってくる事はなかったが、採取で予想以上に手間取ったようだ。

「トトリ、先に帰っててくれ。俺は少し用事がある」

村中央でトトリと別れ、酒場の扉を開ける。

“バー・ゲラルド”はアランヤ村唯一の酒場だ。商売繁盛しているとも言い難い店で、経営状況が崖っぷちとも言える。

「いらっしやい。なんだ、アレアスか」

酒場のマスター“ゲラルド・コーネフ”がずいぶん気に障る言い方で出迎えてくれる。

「悪かったな酒も飲めない未成年で。 “^{ビジネス}仕事”の話だ」

そして経営難の末、副業で出張ギルドのような仕事もしている。
アーランドで冒険者ギルドが発注した依頼の一部を斡旋し、有志や
冒険者に頼む仕事だ。

アレアスも何度が利用し、見合う報酬を得ている。もし依頼があるなら仕事のない明日にでも片付けようと思ったのだ。

「今日、アランヤ村の近郊でモンスターが出た。討伐依頼はあるか？」

「ふむ…ちょっと待ってくれ」

座ったカウンター席にコーヒーを出し、保管棚からいくつかの書類を提示した。

「……どの依頼もぶに討伐ばかりだな。統計するとかなり討伐することになりそうだ」

「依頼は届いたばかりで目を通していなかったが……そのようだ。大丈夫か？」

討伐できるか、という意味でだ。余裕とはいえないが、問題点も見当たらない。

「ああ」

依頼書の期限と最終目撃場所を確認。携行している地図をテーブルに広げる。

「どうやらアランヤ村から西側で目撃例が多いようだな」

目撃例は全て西側のものだった。しかし、場所的に受けられない依頼もある。

實力では問題なく達成できそうだが、その地域は冒険者以外の立ち入りが許可されていない場所だ。つまり、冒険者免許を持っていないアレアスでは受注出来ない。

再び来店を告げる鈴が鳴った。客とは珍しい。

「……マリカ」

振り返った先に居る人物を見て呆然と呟いた。

華奢な人形を連想させる体。腰まで流れる黒髪。幼いながらも、何人も寄せ付けない性格が形となったような蒼眼。

場の雰囲気支配するように歩み寄ってくると、

「久しぶりね」

そう軽い挨拶をしてくれた。

「あ……ああ…そうだな」

一週間に一度は会う機会もあったが、ここ暫くマリカは村を離れていたようで二、三ヶ月は会っていない。

隣の席に座るとコーヒーを注文する。相変わらず、温もり一感じさせない透き通った声だ。

ゲラルドも何人もの客を接待してきたらうに、やはり慣れない場に戸惑っている。

アレアスも初対面して何年も経った今でも、こうしてマリカ特有の雰囲気^{フレイム}に戸惑ってしまうことがあるのだ。どうしようもないだろう。

「仕事か？」

「ええ…しばらく各地で依頼をこなしていたけど…妙な噂を耳にしたから」

「妙な噂？ …ひょっとして、モンスター絡みか？」

頷くマリカ。

なんでも凶悪モンスターが出没したそうで、目撃者の話によると家並に大きい^{ぶに}が襲ってきたとか、^{ぶに}が合体したとか。

「その話、信用性があるのか？ 実際見たわけじゃないだろう？」

「ただの噂に信用性なんてあるわけないわ…でも、放っておく理由もないし。話が本当だとすれば近辺で魔物^{ぶに}が大量発生している理由にも説明がつく」

「知ってたのか」

「ある程度把握してないと仕事をキャンセルしてまで戻ってこない」

依頼書を慣れた手つきで確認し、振り分けた一部をこちらに差し出す。

民間の範囲で受けられる依頼と、冒険者免許を必要とするものに分けたのだ。マリカは冒険者であり冒険者ランクもかなり高い。

腕利きの少女が手伝ってくれるなど願ったり叶ったりだ。

「そっちの方が早めに切り上げられる筈よ。空いた時間に周辺に変化がないか調査して」

「わかった」

なんでも屋として正規の依頼ではないのはわかってる。しかし他人事ではいられない。

何かあればアランヤ村の人達、そしてヘルモルト家の者達へ危害が及ぶ。手を貸すのは当然のことといえた。

「二日でカタはつける。だから三日後の夜、ここで情報を交換しましょう」

それだけ言っただけで冷めたコーヒーを飲み干し、店から出て行った。

×

×

×

「ただいまー！」

「あら、おかえりトトリちゃん。ずいぶん遅いお帰りね」

料理を作っていたツエツイがトトリを出迎える。

見るからにご機嫌斜めだ。原因はもちろん昼間の爆発^{アレ}だ。

「ちょっとそこに座りなさい」

「え、えつと……はい」

トトリは床に正座させられ、ツエツイの説教を聞くことになった。
説教というよりは、苦勞話の愚痴である。

「——もう！ 今度爆発させたら家から追い出すからね！」

「は、はい……」

ようやく終わった。解放されたトトリは恥もなく床に倒れこんだ。

「うつ……足が痛い……」

昼間結構歩いたのでダブルパンチだ。元々運動はあまり得意ではないのだ。体力なんて皆無に等しい。

「はは、今日はかなり長かったね」

「わっ！？ おと、おとーさん！？ いつから居たの！？」

「トトリが帰ってきたときから居ただけだなあ」

父、グイード・ヘルモルトはあまりに存在感が無い事から、こうして自分の娘たちにも気づかれない事が多い。

ちよつとばかり酷い気もするが、普段からある日常だった。

「トトリちゃん、アレアスくん知らない？ もう、遅くなるならならで二人とも連絡しないから」

「……そういえばアレアスくん遅くなるって言ってたような……」

「どうしてそれを先に言わないの！」

「え、ええ！？ だ、だって…お姉ちゃん、帰ってすぐ怒ったし…わ、わたし言おうとしたもん！」

「何よ！ 私が悪いって言うのトトリちゃんは！」

顔を近づけて睨み合う。尤も、傍から見ているれば可愛くて微笑ましい光景なのだが。

「……あー…できればそこまでにしてももらえないか？ 話があるのだが……」

帰ってきたばかりのアレアスは疲れたようにこめかみを押さえてお願いした。

「アレアス君まで、私が悪いって言うの!？」

「いやいや。むしろ状況が呑み込めないんだ。この場は双方共に矛盾を収めて貰えると助かる」

食って掛かるツエツィ。もはや誰でも構わない様子だ。もはや目の前の人物が誰なのかさえ定かではない。

アレアスは呆れたように目を伏せた。

「何よもう！ アレアス君まで！ 私はアレアス君が心配で……えっ……?」

ようやく目に入ったように目をパチクリさせる。

「きゃああつ！ あああ、アレアス君!？ いつ戻ってたの!？」

「二人が喧嘩を始めた時からだが……いや。それより話があるんだ。聞いて貰いたい」

「ええ、いいわよ。待っててね、ご飯温め直すから」

「手伝おう」

「それで……話って?」

夕食に作られた“おさかなパイ”を各自好みに切り分けて口に運

んでいる。

食事中に話を控える事が多いアレアスが物を口に入れていない時を見計らい、ツエツイが尋ねた。

「ここ最近、魔物の活動が活発化しているようだ。討伐依頼が普段の数倍来てたよ。…俺は、腕利き冒険者と協力して事態収束に努めたいと思っている」

ナイフとフォークを置き、テーブルの上で両手を組んでいるアレアス。まるで何処かの貴族のようにも思える気品がある。

「その冒険者の方は…ひょっとしてメルヴィアかな？」

「いや違う。年齢はおそらく俺やトトリと同じ。——だが、実力は保証する」

アレアスが人を褒めるのは珍しい。いくら腕利きとはいえ冒険者と協力するのも例がない。

「それは……それだけ危険な仕事なのかな？」

「まさか」

義父や義姉を安心させるように苦笑し目配していく。

「先程言った情報の出所はその冒険者だ。仕事になりそうな話を、^{ネタ}易々取らせてくれると思うか？」

「なるほどね」

納得したようにツエツイが頷く。

つまり相手側の冒険者はアレアスに協力する事で報酬の半分を得るという事だ。それなら確かに納得のいく話である。

「無理しないでね、あぶなくなったらすぐ帰ってくるのよ?」

「もちろん、命を賭ける程の仕事じゃない」

ようやくアレアスはトトリを見た。不機嫌そうにむすつとした顔で黙々と食べているトトリを。

「不満そうだな?」

「……だって…明日も材料の採取でつだってくれるって思ってたのに」

申し訳なさそうに目を伏せるアレアス。

「すまない。だが、いそじいなんでも屋は依頼主クライアントの信頼が何よりも重要になる。わたくしごと私事で仕事を断る者に、仕事を任せようと思うか?」

「……………」

「納得はできないだろうが、せめて理解はして欲しい」

「……ごちそうさま」

これ以上訊きたくなくて、足早にダイニングを出る。錬金術士

の工房——“アトリエ”に通じる扉を開け、後ろ手に閉める。

——アレアス・ヘルモルト。義兄^{ぎけい}であり、いつも先を歩いている人。

あらゆる事を人並み以上にこなして村の人たちだけではなく近隣の人からも頼りにされている兄。

ほんの二年ほど前は、自分よりも賢くて強くて優しい兄から構って貰えるだけで、嬉しくて誇らしかった。

…でも、“なんでも屋”を始めてから…目に見えて一緒の時間も減って…減った時間だけ仲良しだった頃からズレていく。

今なんて、こんな些細な話で仲違いをしてしまう浅い仲だ。

（私が…何もできないから）

何も、出来なかった。家事を手伝えれば失敗ばかり、運動をしても人より遅くて、勉強をしてみても全然わからない。

それが…あの頃の…錬金術を知る前の“トトウーリア・ヘルモルト”だ。

「今は……違うから」

部屋の隅に置かれたコンテナ。格納してある物は全て錬金術の素材や調合して作成した物^{アイテム}だ。

錬金術とは物質の組成を再構築して新しく別の物質を生み出す技

術体系。そして“アイテム”とは錬金術によって生まれた産物である。

コンテナの中を漁り、先生から手渡された参考書を取り出す。柔らかいフカフカのソファーに座って、目を通し始めた。

「えっと…何を作ろうかな…？」

紙に書いて挟んでいた材料の使用履歴にある材料と相談する。品質から物の特性まで、事細かに書かれたメモを吟味するだけで、嫌な気分はすっかり消えていた。

「うん！　じゃあ“クラフト”を作ろう！」

錬金釜にさつそく火を付ける。作業台に置いていたフラスコの中身を全て投入し、試験管に入っている緑色の液体を数滴垂らす。

コンテナから使う材料を取り出した。“ニューズ”と呼ばれる物体。球体に大量の棘がついた木の実だ。

これこそ、今回の錬成物質となる重要な素材。投入した後は何度も慎重すぎるくらい参考書に目を通して失敗しないよう専用の棒でかくはん攪拌していく。

後は変化を見落とさないよう目を凝らして根気強く棒を回し続ける。

「楽しそうで何よりだ」

「ひゃあっ！」

足場を踏み外して鍊金釜に落ちそうになるが、素早く手を伸ばして服を掴んでくれる。

「も、もうっ！ 入ってくるならノックくらいしてよ！」

「いや、十回はした。しかし、反応が全くないのでな。夜食が冷めても困る」

トレイに乗っていたのは魚のスープと夕食のおさかなパイを一口サイズに切り分けたものだ。

おさかなスープはアレアスの手作り。ダシを魚から取り、独特の生臭さを風味に変えるべくハーブがふんだんに使われている。

味はツエツィのお墨付きで、夕食から既に四時間以上経っている今、スープの香りだけでもお腹が空いてきた。

「ありがとう…ごめんね、忙しいのに」

「好きでしてる事だ。明日の準備だつてとっくに出来てる」

嫌味なく言つて、差し出されるトレイを受け取る。

少しだけ離れた机に置き、きちんと椅子に座って食べ始める。横目にアレアスを見ると、鍊金釜を見つめていた。

「アレアスくんも鍊金術してみたいの？」

願望も込めて尋ねる。が、予想通りに首を振る。

「——いいや。ただ、興味はある。錬金術が行き着く先には」

「行き着く先…？ それって、私がもつと難しい調査を出来るようになったらってこと？」

「まあ…概ねはそうだ。——ただ、俺が思うに錬金術の汎用性はおそらく一般常識を覆しかねない程のものだ。つまり……」

そこで止めてしまう。そして自嘲するかのように笑った。

「いや……すまない。こんな事は言うべきじゃないな。忘れてくれ」

「えーっ！ 気になる！ 教えてよ！」

「わかったわかった」

さっきより優しい口調で窺めるように言って、ベットに座る。

「ただ、それはトトリが錬金術士として一人前になった時の為にとっておこう。トトリなら、きっと出来る筈だ」

「う…うれしい…けど…どうしてか上手くはぐらかされてる気がするーっ！」

少女の叫びと少年の微かな笑い声が静かに建物の外まで響いた。

二人のいる外側の扉。真新しい看板が揺れている。

アーランドの伝統的な看板と同じく、業種を図案化した意匠。こ

の看板には錬金術を意味する太陽と月。真新しい塗料達が色鮮やかに踊っている。

そして、そこにはこう書かれている。

—— Atelier Totori —— “トトリのアトリエ”
と。

第二話

「ずいぶん素敵なか好をしているわよ、貴方」

「そりゃどうも」

対面席に座ったマリカに皮肉を返す元氣もない。帰る途中大量の魔物ぶにが襲ってきた。さすがに百体近くとなると攻撃する拍子に飛び散ったゼリーを躲す余裕もない。

体も武器もゼリーまみれ。気持ち悪くてしょうがない。

座っているのはカウンター席ではなくテーブル席だ。

「使いなさい」

投げて寄越されたのは女の子らしいピンク色のハンカチ。マリカの性格に似合わなさすぎて笑ってしまう。

「…嫌なら、使わなくてもいいのよ？」

相変わらずの無表情だが、微かに拗ねているような気がする。

「いいや。ありがたく使う」

常備しているハンカチはべとべとで使い物にならない。マリカが貸してくれたのは素直にありがたい。

「それで…収穫は？」

「依頼は予想以上に早く終わったわ。まさか“一日”で終わるとは思わなかった」

「奇遇だな……俺も”一日”で終わった」

仕事が早く片付くのは普通なら良い事だ。しかし、今回場合、最悪だ。あの大量にあった仕事がすぐ終わるという事は、一度で遭遇した数が圧倒的多かったという事だ。

互いの依頼書を見ると討伐数が異常な数だった。

「千ほど討伐数で負けてるな」

「勝負なんてしてない。——私は貴方より遠い西側で討伐した。貴方はアランヤ村の近くで討伐した」

地図を広げて書き込む。討伐した場所、時刻、数まで書く。こちらの情報、余った時間で回った他の方角の情報も付け加えた。

「やはり…西側に集中しているわね」

壮観だ。西側はもはや印で塗りつぶされている。他の方角には殆ど付けられていない。

「ああ…しかも遠方に出ると遭遇率が上がるみたいだな」

マリカの居た辺りは比較的に印が多い。一度で討伐している数も断然多い。

「…………結論から言って、この近辺はぶにの縄張りになっているかもしれないわ」

「縄張り…？ 魔物でも縄張りを作るのか？」

「ええ。縄張りを持つ事で退けられる危険は沢山あるもの」

「なるほど…………」

弱小の魔物とはいえ、数百は初心者に辛過ぎる。まず袋叩きにされ最悪帰って来られなくなる。

一体一体が弱くても集団となって襲いくる群れは、相応の実力者でなければ撃退すら困難だ。

アランや村なんてド田舎に上昇思想の強い、上級冒険者が現れる筈もないし、かといって一般冒険者じゃ舌を巻く今回の一件。

このまま引き下がれば何が起きるかわからない拳句、問題そのものが放置されてしまう。

「貴方はどう…？ 討伐しきれる？」

「さあな…出来るかもしれないし、出来ないかもしれない」

謙遜でも誇張でもない。事実だ。自分の限界は一度も見たことが無いし、為そうとする事は全て成功させてきた。

だからこそ、今回もまたやってみなければどう転ぶか判断に困るところ。

アレアスの返答に期待も落胆も見せず鼻を鳴らし、店主ゲラルドを呼ぶ。
年に似合わない珈琲コーヒーを注文し、話に戻った。

「私が戻ってきた理由、覚えてるかしら？」

「ああ……」

家並に巨大な“ぷに”の目撃談。単なる茶飲み話として多少は聞き流していたが、確かに縄張りなんてものを作ったのなら、

背景にそんな凶悪モンスターが絡んでいる可能性は拭えない。――
が、もしソイツが絡んでいるとしたら、逆の意味で問題が浮上する。

「まさかソイツが関係してるんじゃないだろうな？」

「ほぼ間違いなく絡んでるわ。ここを牛耳るのがソイツよ」

最も印が集中している場所を示した。何回か通っている事を見ると、既に目星は付いていたのだらう。流星に年季が違う。

だが……まずい事になった。これは間違いなくアウトラインに突入している。下手に口外しようものならツエツィの耳に入り、仕事を強制中断させられかねない。

出来るだけ秘匿して事を運ぶようにしよう。

「ならソイツを倒せば、集団の統率が崩れて、ぷに達も散るだらう」

「それが可能ならね……」

ため息をつくマリカ。鬱陶しそうに髪をかきあげる。

「当然リーダーだから通常のぷにより遥かに強いし、子分のぷに達も大量に居る。それに茂みや木が多い場所だから炎上させる爆弾は使えない。…正攻法では勝機は薄いでしょうね」

爆弾が使えないとなると剣のみを頼りにあの集団と巨大とされるリーダーぶにの相手をする事になる。あまり賢明とは言えない。爆弾に代わる対集団戦用の武器が必要になる。

「……そろそろやめましょう。事を急いでもロクな事にならないわ。明日の夕方にまたここで話しましょう」

今日は珍しくもバー・ゲラルドに夜の客が入ってきた。確かにあまり口外したくない内容だ。日を改めるべきだろう。

「ああ、そうだな——と、待ってくれ」

珈琲の代金だけ置いて出ようとしていたマリカが振り返る。

「このハンカチ、明日には洗って返す。ありがとうな」

「別に、捨ててくれてもいいわ」

冷たい言葉を吐き捨てて酒場から出て行った。

もう慣れてしまったのか、それとも少女自身が優しいのか。何故かアレアスには、言葉ほど冷たくは感じなかった。

「ただいま」

ダイニングは小さな蠟燭の明かりこそついていたが、誰もいない。全員が寝ているのかもしれない。

錬金工房と部屋を兼ねているトトリはダイニングの隣が寝室だが、アトリエ以外は全員二階の別室が寝室となっている。

屋外でアトリエの入口から隣にある階段から上がるので、雨の日なんて最悪だ。

唯一の救いはアランヤ村がどの気候でも温暖である事だろう。おかげで雨にぬれてもすぐ乾くし、洗濯もし易くて助かっている。

「あれ……アレアスくん……？　いつ帰ってきたの……？」

眠気に耐えるよう目を頻りに擦りながらおぼつかない足取りでダイニングへ入ってきた。

「ちょうど今帰ったところだ」

「へー……………え…？　ええ…？」

眠そうにしていたトトリがアレアスを見て徐々に強張っていく。顔も一瞬にして真っ青になった。

直感的に耳を塞ぎ事態に備える。

「ああアレアスくんっ、どうしたのその恰好！？　なんでそんなにボロボロなの！？」

本気で驚いたようで目尻に涙まで浮かんでいる。当の本人は既に開き直っていた所為で、原因に思い至るまで時間を要してしまったが。

「お、落ち着け！　怪我はしてない！　これは全部ぶにを斬った拍子に付着したものなんだ！」

「うそだよ！　アレアスくんいつもはモンスターも楽々と倒すもん！　怪我だって一度もしなかったのに！」

トトリの言葉は少しだけ間違っている。一度も怪我しなかった筈が無い。怪我は日常茶飯事だ。しかし素直に「怪我しました」なんて言いはしない。

ツエツィやグイードに心配を掛けるだけで、何度も続くと仕事が辞めさせられる可能性もある。だから怪我した事は口外しなかったし、トトリの前では出来るだけ強く見せるよう圧倒的にモンスターを倒すよう心掛けている。

そうする事で間接的にツエツィやグイードの不安を減らしていくつもりだった。

が、今回はそれが裏目に出た。もちろんこの可能性も予測しなかった訳ではない。物事にはメリットとデメリットが必ずしも存在する。アレアスが強いと完全に信じ切ったトトリが、もしアレアスが

怪我する状況なんて見てしまうと、

今まで積み重ねてきた“アレアスは強い”という掘り込みが崩れるだけでなく、壊れた容器が中身の流失を押さえられないのと同じくして真実が瓦解するのを防ぐ手立てはなかった。

家に帰ってきて気を抜いた事を悔い、手でトトリの口を塞ぐ。多少乱暴ではあるが夜の静けさは喧騒を響かせやすい。これ以上騒ぐとツイツイやグイードまで起きてきてしまい、今のアレアスの恰好を見る事だろう。そうなれば本当に終わりだ。

「俺は、怪我なんて、してない。そうやって怪我しているように言われるのは不快だぞ？」

言い聞かせるようにトトリに言う。騒いでいたトトリも急に冷たい声音になったアレアスが怒ったと思ったのか、黙り込んで暫くすると静かに頷いた。

すぐさま開放すると一息ついてアレアスは椅子に座り込んだ。背もたれによって張り付く服が冷や汗を吸い取って不快だ。

「悪かった乱暴だったな、許してくれ」

「うっん…私の方こそ……ごめんね…驚いちゃって…お茶いる？」

「ああ、頼む」

場の空気を換えるように話を変えるトトリ。二もなく乗った。下手に蒸し返されても困るのはアレアスだ。

時折、最善なら例えどんな手段でも取る自分が嫌になる。先程だってあんな乱暴を働かずとも口先で言い包められただろう。

ああ。言い包める事は出来た。――が、それにはあまりに時間がかかりすぎる。あれが最も効率よく最善だった。

結局冷静な自分が感傷的になる自分を諫めて終わる。全部正論故に反論のしようがない。

（――くそつたれ）

この世界に最も嫌いな存在が居るとするなら、それは他ならない“アレアス”だろう。堪らなく憎い。もし目の前に現れたならこの手で始末してやりたいとさえ願う。

トトリの容れた薄色のお茶に映る自分が、自嘲しているような気がしてならなかった。

「アレアスくん…？」

「っ――悪い。どうした？」

慌てて笑みを張り付ける。トトリも眠気が冷めているようで受け答えがだいぶんとはつきりしている。

「今のアレアスくん、すごく顔が怖かったかも」

――本気でカチンときた。頑張って浮かべた笑顔が怖いとはどういう事だ。

失言だと気付いたトトリが慌てて訂正に入る。

「あ、ちが…っ！ そうじゃなくて、…ええっと…怖かったって言っても小悪魔さんみたいなのじゃなくて…なんかこう…悪魔さんみたいって…あ」

明らかにランクアップしている。つまり暗黒世界を牛耳れるほど顔が怖いと、そう言いたいのか。成程。よくわかった。

「…………トトリ。ごまかしたいのか怒らせたいのかどっちだ」

お茶を飲み干す。見た目同様味も薄い。これじゃ客に満足なお茶は容れられないだろう。時間がある時にでも容れ方くらいは教えるべきかもしれない。

「謝りたいです…」

「全くの逆効果だよ、ありがとう」

ますます小さくなるトトリ。苦笑を残して席を立った。

「風呂にでも入ってくる。トトリも早く寝ろよ？ 夜更かししてる悪魔さまに怒られかねんぞ？」

返事は帰ってこなかったが、微かな笑い声が耳をついた。多分笑っているのだろう。我慢するならバレないようにするべきだということにまつたく。

とはいえ、アレアスもこんな冗談が嫌いではない。むしろこんな馬鹿みたいな冗談だけで笑えるのなら、幸せで素敵な事だと思う。

理屈も計算し尽くされた行動・言葉なんて必要ない。ただ、自分の想いをすらすら打ち明けて人を温かい気持ちにさせてくれる。――偶に傷を抉ってもくれるが。

ともかく、こうしたトトリの会話が一種の楽しみとなっているのは間違いなかった。

第三話

アーランドは城壁に囲まれた、石造りの街である。城壁には城門があり、そこが街全体の表玄関となっている。

門をくぐると大通りが街の中央広場へと続く。つき当りにそびえ立つのは旧アーランド王国の王宮だ。

大通りによって二分される市内の北側は“工場通り”と呼ばれ、最新の機械技術による工業施設が立ち並んで日夜稼働している。

南側には昔の街並みが残っている。市内を流れる川の両側には商店や職人店が軒をつらねた区画となっており、“職人通り”と呼ばれている。

旧アーランド王国の発展に大きく寄与したという稀代の錬金術士“ロロライナ・フリクセル”のアトリエもそこにある。

現在、アトリエの主が不在^{あるじ}なため仕事はされていないが、業績は高く、錆びれていた錬金術という技術体系も評価されるようになった。

装飾華美なエントランス。冒険者ギルドの受付として使われているその場所は、早朝の時間帯といえども冒険者の姿が見られた。

王宮の扉が開かれる。冒険者の一人が目を向け硬直する。相方の変化に何事かと目を傾けた者も、ギルドの役員さえ見入っている。

場が異様な程静まり返っている。

少女は全員に一瞥くれないと言葉を発する事もなく歩き出した。願望も畏怖も尊敬も、興味すら惹かれない。

「久しぶりに見たわねその顔」

「……………クーデリア」

「ほらあんた達はぼけっとしてんじゃないわよ！ さっさと仕事しなさい！」

手を叩いて発破をかける。手慣れているもので瞬く間に全員が自身の仕事に戻っていく。

「感謝するわ」

「礼なんて良いわよ。仕事の邪魔されて困ってたのはこっちだし、有名人さん？」

軽く笑ってマリカの肩を叩く。金髪の女性。名は“クーデリア・フォン・フォイエルバッハ”。ギルドの受付、冒険者免許の更新を担当している。

年齢の割に小柄なのも本人の特徴と言える。背丈はマリカと同程度しかないのだから。

ただ、本人も身長は気にしているようで、その事については逆鱗なので口にすると烈火の如く怒り出すが。

「冒険者歴二年程度の若輩者を有名人なんて持て囃すのは止めた方がいいわ。程度が知れるから」

「あんたに口で勝てる気がしないわね……。ま、現状その通りよ。ボンクラばかりで今の冒険者は使い物にならない。免許の更新さえ満足に出来ず辞める奴もいるぐらいよ……」

受付に戻り、マリカも続く。

「——で、あんたは？ 最高ランクになった途端、急に仕事を受注しなくなっただけど？」

「他にやる事があるから」

「ふうん……ま、追及はしないけど、偶にはこっちの仕事もやりなさいよ。業績が低迷するとギルドの^{ウチ}評判に関わるんだから。」

——念のため確認するけど……お飾りにする為、ランクを取ったワケないわよね？」

「ええ——必要だから取ったの。それより、仕事の話をしてましょう」

「はいはい……あんたが無駄話に冒険者^{ギルド}へ足を運ぶわけないもんね。言いなさい」

マリカが話したのは“ぷに”の大量発生の事である。依頼を発注しているギルドがそれについて知らない筈はない。こうして足を運

んだのは“ある”情報を開示して貰う為である。

「ああ……それね……」

苦虫を潰したような表情の変化。些細なものだったが感づいたマリカは視線を強める。

「ぶに達は弱いわ。モンスターの中でも破格に。でもだから自ら縄張りを変えるなんて有り得ないの。——それこそ、

凶悪な魔物が縄張りへ踏み入るような事でもしない限りはね」

「……………」

「…………ぶにの足跡を遡って、前の住処らしき場所に行ってみたんだけど、ドラゴンの足跡と焼き払われて真っ黒になった地面が見られたわ」

「まどろこしいわね。つまりこう言いたいワケね。ドラゴンは自分から住処は変えない。変えたら何者かがドラゴンを興奮させて、

追い詰めさせるぐらいはしないといけないって。

マリカ、今回ばかりはあんたが正しいわ。今回の背景には冒険者ギルドの冒険者が関わってるの」

「でしょうね」

「二ヶ月前に危険視されてたドラゴンを討伐する依頼があってね、

手練れのパーティーが討伐に向かったけど返り討ち。最悪な事にドラゴンが興奮しちゃって

手当たり次第暴れ回り始めたのよ。——だから周辺モンスターの近況を確認する意味も兼ねて討伐依頼をいくつも出していたわ」

「……ドラゴンは？」

「自称騎士……スperlなんとかって奴が討伐したみたい」

「ステルケンブルク・クラナツハでしょう。いい加減名前くらい憶えてあげなさい」

「捨テル犬でもスケルトンでもいいわよ。まあとにかく、不始末の責任はギルドにあるから、出来る限りの協力はするわよ」

「必要ないわ」

要は済んだとばかりに踵を返す。背後で何か言うクーデリアの声でさえも、もはや聞いていなかった。

×

×

×

「やった……！ やったあ——！ 完成——っ！」

歓声がアトリエから聞こえてくる。ダイニングで料理を作っているツェツイと共に顔を見合わせて笑う。

「朝から元気ね、トトリちゃん」

「ああ、すぐにも見せびらかしに来るだろうよ」

見計らったかのように扉が開かれトトリが駆け込んできた。

「お姉ちゃん！ 見て見て！ ほら、ほら！ これ錬金術で作ったんだよ！」

「凄いじゃない。何するものの？」

あちこちに突起が飛び出している円盤のような物を渡されたツェツイが尋ねる。

「これに衝撃を加えたら棘が飛び出すようになってるんだよ！」

微妙な顔をする二人。トトリが首を傾げ、代表するかのようにアレアスが言った。

「用途がわからない。どんな時に使うんだ？」

「……えっと………も、モンスターと戦う時とか？」

「お前は戦えないし、そもそも……」

「そんな危ない事はしちゃダメよ？ もしするならアレアス君みた

いに遅しくなっただけかな?」

ツエツイは危険な事をトトリにやらせたがらない。錬金術の調合ですら火傷の心配をして見に行く重度のシスコンなのだから。

「うう……そんな無理です」

「そうだろうな。野宿なんてトトリには無理だろうな。寝ている時に蜘蛛が顔に落ちてくるなんてザラだぞ?」

「寝てる時……クモが……うわああっ! 無理! 無理だよ!!
うわあああんっ!!!」

ばつちり想像してしまっただけ、泣きながら部屋に戻って行った。

「軽い冗談だがな。俺だって無理だよ」

「あら? アレアス君虫苦手だった?」

「いや、虫が顔についてる状況は特殊な性癖でもなければ生理的に受け付けないさ」

「メルヴィならその点大丈夫そうよね」

「ああ。『こんな所に虫が居たわ。あっぱっぱ』とか。その程度で済ますだろうな」

「そんな事言っちゃって、いいの?」

「周りには注意を払ってる。少なくともこの周辺には居ない」

「私が言うかもしれないわ」

「それは勘弁してくれ」

「ふふっ、冗談よ」

果物の皮を剥く作業に戻り、アレアスは焼けた魚を皿に載せていく。

「ありがとう。助かったわ。お仕事は大丈夫なの？」

「今日は昼頃まで家に居る。夕方から出かけると思うから夕食はいいよ」

「もう！ またそんな事言って！ 待ってるから、早く帰ってきてなさい。でないと私たちがお腹空いてしまうから」

「……わかった。出来るだけ迅速に済ませる」

アレアスは空腹だとしても我慢するし、場合によっては躊躇いなく食事を抜く。しかしそれは自身だからであって、他人が絡むと一気に押しが弱くなる。

ツェツィが自分たちを対象にしたのは、その方がアレアスも注意してくれるからだ。

自分より他人が大事。

アレアス・ヘルモルトという少年はいつだって、自分よりヘルモルト家の事を第一に考えてくれる。

嬉しい反面、一抹の悲しさがツエツイには拭えない。

どうしてもつと自分を大切にしてくれないのか。何故アレアスは誰にも心を開いてくれないのか。

アレアスの顔を見る度、ツエツイは問われている気がした。

——心が観えるか？と。

強く、賢く、誰よりも優しい少年が考えている事が分かるか、と。

結論はこう——解らない。

自分達を助けてくれる事は確かだが、それ以上は何も解らない。

過去を失った少年。アレアス。

アレアス・ヘルモルトとして生きている今でさえも、少年から答えが返ってくる事はない。

「ツエツイ……？ どうした？ 何か心配事か？」

「ううん、なんでもないわ」

手を止めて頭を撫でる。トトリは子ども扱いされると怒るが、逆にアレアスは戸惑っているように目を白黒させる。

「――俺はぬいぐるみじゃないぞ」

「わかってるわよ。私が撫でたいから撫でてるだけ」

「――好きにしてくれ」

苦笑交じりの言葉でそっけなく言い、皮剥き作業に戻る。

アレアスが手伝ったにも関わらず、今日の朝食は遅くなりそうだった。

×

×

×

木によって作られた模造剣を構えて対峙するのは二人の少年。一人はアレアスで、もう一人はジーノ・クナープという少年だ。

トトリの友人で、アレアスとはこうして刃を交える友人関係？を築いている。

「ジーノくんがんばれー！」

トトリの応援を背にジーノは木剣で斬りかかる。迷いない大振りの太刀筋は容易く見切られ、当然のように躲される。

「どうした！ 人形と遊んでるんじゃないぞ！」

声をした方向を直感的に見るが、誰もいない。次の瞬間、背中を激しい衝撃が貫いた。回り込んだアレアスの回し蹴りだ。

衝撃を利用して転がり、すぐアレアスから距離を取る。

「へっ、やっぱりライバル同士はこうでないとな！」

アレアスは認めたわけではないが、ジーノの頭の中ではそうなっているらしい。

「うっし！ 今度はこっちからいくぜっ！」

「え？ さっきからジーノ君が後ろに下がってばかりだけど……」

「余計な事言っくなよっ！」

トトリにツツコミを入れつつ突撃する。勢いを付けすぎて構えが崩れている。攻撃に対してあまりに無防備だ。崩すのは造作もない。

ジーノの踏み込みを上回る踏み込みで肉薄し、勢いに怖気づいたジーノが瞬時の判断を決めかねて硬直する瞬間、剣を右手に持ち替える。

右手の手首を掴んで武器を落とさせ、首筋に刃を向けた。

「これで892勝目だな。ライバルを名乗るなら、せめて一度くらいは引き分けに持ち込んでくれ」

がつくりと肩を落とすジーノが剣を拾う。

こんな関係が続けて三年だが、ジーノの筋は悪くない。ただ、自分に見合う戦い方を模索している最中だからこそ伸び悩んでいるだけなのだ。

「は……また鍛錬しなおさねーとな」

「ああ。反復訓練だけはいつでも続けられるようにしろ。体作りがなっていないと鍛錬なんて意味をなさない」

「そりゃわかってるけどさー……どうせなら戦い方を教えてくれよ」

アレアスはジーノに戦い方を教えていない。頼まれても断り続けている。

別にジーノに強くなって欲しくないからではない。逆に、本当に強くなって欲しいからこそ、何も教えないのだ。

人の戦い方というのは人それぞれだ。アレアスにはアレアスの戦い方があり、ジーノにはジーノに適した戦い方がある。

適していない戦い方なんて体に馴染ませてしまえば、それこそ永遠に才能が潰えてしまうのと同義。

だからこそ、ジーノには自分で自分なりの戦い方を見つけて欲しかった。

「何度も言っているだろう。お前は力は大したことないが、敏捷性と行動力自体は悪くない。」

大振りの一撃を狙う事さえやめれば、もう少し防御の方にも気が回るんだ」

「んな事簡単に言ってもさ、難しいんだって」

「言い訳だな。お前は強くなりたいのか、なりたくないのかどっちだ？」

「なりたいに決まってるだろ」

「なら、難易度の問題じゃないだろう？」

「だな……うつし！　じゃあもう一回勝負しよーぜ！」

「ああ。今度は防御を意識しろ。剣で武装してるクセに格闘術を許すくらいまで敵に間合いを詰めさせるな」

倒しては指摘を繰り返すアレアス。表情こそ普段と変わらないが、心なしか楽しそう見えるのはどうしてなのか。

（男の子って、みんなそうなのかな……？）

剣が好きだったり、鍛錬が好きだったり、戦う事が好きだったり。

ジーノに尋ねても帰ってくるのは一言返事だが、果たしてアレアスはどうなのか。

のびて地面に倒れているジーノを余所に手を休めているアレアスに尋ねる。

「いや、そんな事はない。確かにより斬れる剣ならば効率も上がるし、自己研磨は己の向上に繋がるものだが、

別段好きでやっているわけじゃあない。ましてや戦いや力を好むのは論外だ」

「どうして……？」

「力は単純だ。理屈云々じゃなく純粹な強さで正当性を問う事が出来る。実に合理的かつ効率の良い手段だ。

食い扶持に困った者達が賊となり、人々から力ずくで物を奪うなど、よくある話だろう？

それはな、誰もが本能的に手っ取り早いと認識してるからだ。身の上話をして情に訴えるより、余程に確実だしな。

話が逸れたな——ともかく、そんな手段だからこそ、俺はなるべく使いたくない」

「使わないじゃなくて？」

「そう言える奴が居るとしたら、まだまだ子供だな」

「むー……子供扱いしないでよ！」

「ああ、悪かったよ。話を戻そう。どうして使わないのかは簡単だ。目先の利益しか得られないからだ。

先程の例を出すなら、村を襲って物を奪うなどいつでも出来る。

しかし情に訴える事は襲う前にしか出来ず、それによって得られた筈の利益も根絶やしにしてしまうだろう？

俺なら、力で訴える前に別の手を講じるな」

「——なんかアレアスくんが賊みたいだね。今の話だと……」

「——なんなら、トトリたちを襲って見せようか？」

「大丈夫だよ。私もお姉ちゃんもアレアスくんを信じてるから！」

屈託の無い笑顔をアレアスに向けて言う。何かを恥じ入るようにトトリから視線を逸らすと棒を地面に突き立てた。

「——すまない、過ぎた冗談だった。忘れてくれ」

腰に付けている水筒の蓋を外して傾ける。大量の水がジーノの鼻を強襲した。

「ぶべっ、ぐぼっがばがはっ……！」

容赦の無さに苦笑いを浮かべながら、トトリはジーノが帰るまで見守り続けた。

昼食の片づけも終わって一度休憩したいところだが、そうもいか

ない。マリカと会う夕方までに見回りから多数戦想定の武器まで考えなければならぬのだ。

部屋に戻って装備を確認する。

剣二本、ナイフ四本、フラム五個。

多数相手に使える物は小型爆弾のフラムだけだろうが、火薬を使っている爆弾は駄目だとマリカは言っていた。除外して考える。

—— 無い。今回扱えそうなものは無い。

物騒な装備を布で包んで紐でしっかりと縛り、ベットの下へ転がす。タイミングを見計らったようにトトリが部屋に入ってきた。

「アレアスくん。……その、今から森に行きたいんだけど……護衛をお願いしていい……？」

「今の森は危険だからあまり言っただけ無駄が……トトリは変なところで頑固だし言うだけ無駄が……構わないが、何をするんだ？」

見回りを兼ねて森へ向かうなら無駄にはならない。しかし、危険だと承知の上で森へ行く理由の方が気になった。

トトリが取り出したのは先程見せた“クラフト”と呼ばれる物だ。アイテム

「これが使えるか確かめて見たくて……」

“クラフト”というのは爆弾でありながら火薬を一切使わず、二ユーズの実の衝撃を与えると弾ける特性を利用して棘が飛び出すよ

うにしたエコ爆弾だ。

もしこれで威力が実用足りうる物なら、現状の問題が解消できる。仮に無理でも改造を施せばある程度の補強は望めるかもしれない。

様々な手段を考えながら、アレアスはトトリの護衛を引き受けた。

第三話（後書き）

A d v ↑ 総合的な強さ基準 L V

友好値 ↑ トトリへの友好値 高いほど仲が良い

H P ↑ キャラの体力

M P ↑ 魔力量。スキル使用に必要な

L P ↑ 一言で言えばスタミナ

攻撃力 ↑ 相手に与えるダメージ

防御力 ↑ ダメージを軽減する能力

素早さ ↑ 回避や命中率に大きく関わる

↓ 属性 ↑ 属性ダメージを軽減する能力

スキル

『 ??? 』 ↑ スキル名

（通常 / 10）

左はスキルの効果タイミング。通常はコストを消費して使用して効果を発揮する。

常時は常に効果が出ているスキル。

アシストはトトリが特定の行動をした時発動するスキル。

必殺技はコストを消費せず、戦闘状況によっては使用可能になるスキル。

右はスキルを使った時の消費コストである。

名前：アレアス・ヘルモルト

年齢：13歳

誕生日：3月17日

身長：160cm

武器：ロングソード

防具：港町の服

装飾品：なし

【ステータス】

Adv・Lv7 友好値：2

H P 91

M P 60

L P 73

攻撃力 52

防御力 45

素早さ 49

炎属性 0

氷属性 0

雷属性 0

土属性 0

【スキル】

『烈斬剣』（通常／10）敵単体に物理攻撃＋必中クリティカル
『戦術知識』（常時／0）味方のステータスを上昇させる
『見切り』（常時／0）ターン経過毎に命中率・クリティカル率・
回避率が上昇する

【メモ】

ヘルモルト家に居候している、万能少年。本作の主人公。
性格は皮肉屋で現実主義者。理に適った最も効率性の高い行動ならば手段を問わず実行する強さも持っている。
ただ、冷血漢というワケでもない。何だかんだと言って困っている人を見ると手を差し伸べてしまう。
表向きトトリリア・ヘルモルトの義兄になっているが、本人は気乗りせず、本名を名乗る事は全くない。

異常なまでの万能人間で、一言で言ってしまうと“なんでも”出来る。モンスターとの戦い、家事全般、など朝飯前。
料理は特に、わずか一年でツェツィーリア・ヘルモルトを唸らせる腕前に上達した。

そんな背景と少しでもヘルモルト家へ掛ける負担を減らそうと思い始めた事で“なんでも屋”を開業するに至った。

“なんでも屋”の仕事は単純明快。なんでもするのである。無論、相応のお金も取っているが。

ただ、払う金額は仕事内容の最低限で、にも拘らず手抜きが無いため仕事ぶりの評判が高い。今ではすっかり村で一番頼られるようになってしまい、

昔のようにトトリやジーノと遊ぶことは殆どなくなった。

第四話

「準備はいいか？」

声をかけた先でトトリがコクコクと頷く。緊張しているのか、肩を震わせている。

「標的は三匹。青ぶに二匹と緑ぶに一匹だ。こちらに気付く前に力タをつける」

茂みを隔てた向こう側に居るぶに達を確認して言う。

「うう……そう言われると余計プレッシャーが……」

「大丈夫だ。万が一トトリが失敗しても怪我はさせん。どの位置からでもお前を守れてこそ“護衛”だからな。距離なんて関係ない。安心してお前に出来る事をしてみる」

「……………そうじゃなくて……………」

「——ああ」

トトリが不安に思っていたのは失敗した後ではなく、失敗する事だったのだ。

逡巡して感づいたアレアスは笑みを零した。

「失敗したくないか？」

「当たり前だよっ！　好きで失敗する人なんていないもん！」

「そうか……？　トトリが失敗して爆発を起こすたび黒いキノコ雲が見れる所為で、今ではアランや村名物の一つだぞ？」

「嘘っ！？　嘘だよ！」

「嘘は言わない。――都会でも田舎でもそうそうお目に掛れない光景だろう？　爆発は」

「うっ………」

唸り声をあげて睨まれる。逆効果なのは分かっていたが、想定通りの結果は出た。怒りの矛先がアレアスに向いた事で、緊張感が中和されたのだ。

ただ、トトリは自信の無さはかなり根深い。あと一押ししておかないと安心は出来ない。

「さて。では仇敵からのアドヴァイスだ。行動を起こす前に、必ず、成功している自分を思い浮かべるんだ。漠然としていても構わない。ただ成功さえしていればいいんだ」

「成功している……自分………」

「失敗するかも……だなんて間違っても思っな。そんな考えで行動するなら、しない方がよっぽどマシだ。お前なら出来る、俺は、そう信じてるぞ」

「……………うん」

緊張が抜けたのか、今までにない力強さが声には籠っていた。もしかしたら、一皮剥けたかもしれない。

（ま、悪くはないだろう）

どうやら“ぷに”が食事を始めたようだ。強襲には絶好の好機である。

トトリは何度か深呼吸を繰り返して、茂みを見つめる。“錬金術士の杖”を右手に握りしめて、一気に走り出した。

ぷに達が音に気付いて食事をやめる。トトリも距離を詰めず足を止め、道具^{アイテム}ポーチから“クラフト”を取り出した。

「えいつ！」

トトリが投げたクラフトはぷに達の中心地で爆散する。無数の棘が飛び散り、ダメージを与えていく。アレアスの予想以上の威力で“青ぷに”は初撃の時点で倒れていた。

“緑ぷに”もダメージが深刻なようで、どうも動けずにいる。トトリはもう一度、クラフトを握りしめ、“緑ぷに”へ直撃させた。声も出す事なく倒れる。

「ほつ……」

トドメは“クラフト”を使わずに杖で殴っていればより完璧だったが、初戦でこれ程冷静に戦えるのなら及第点だろう。

早急に叱責すべき点はない。

だが……多数相手に使うのは、はたしてどうなのか。

威力という点では申し分ない。目的はあくまでリーダーぷにを討伐する事であり、雑魚ぷにを倒す必要はない。

完全に倒し切る事は出来なくても、行動不能に追い込めるだけで十分だ。

「ほんとに……できたんだよね……？ ゆめじゃないよね……？」

目を瞬かせて何度も自分に問いかける。そして――

「やっつったー！ー！ー！ やったよお！ アレアスくん！」

まさか飛びついてくるとは予想外だったアレアスが一步後ろに下がって受け止める。

「子供か」

呆れたような声にも耳を貸さず、嬉しそうに笑っている。相変わらず、周りにも幸せを振り撒くような笑顔だ。

見ていてこちらも楽しくなってくる。

もうしばらくその笑顔を見ていたかったが、素早く引つpegして腰の剣を抜く。トトリを庇うように一步前に出た。

「ど、どうしたのアレアスくん！」

「囲まれた」

証明するかのように全方位の茂みから緑ぶにと青ぶに達が姿を見せる。後ろから不意をつくかのように飛来してくる物体。

「うわっ！」

手を引いて地面にトトリを倒し、剣閃を以て迎撃する。綺麗な一閃で両断された球体が果物のように割れ、左右の地面へと転がってゼリーを散らす。

トトリは指示を飛ばすより早く、前面のぶに達へクラフトを投げていた。爆ぜる音と共にぶに達が倒れていく。

先程の自信が後押ししているのか、絶好調だ。これなら、危険を冒す価値はある。

「トトリ、いいことを思いついたぞ」

「えっ、なに？」

背中合わせになってトトリへ告げる。緊張している心臓の鼓動まで背中越しに伝わってくる。

「トトリが俺に指示を出してくれ。俺はそれに従おう。お前自身の力で現状を打破してみろ」

「ええええええッ！！！！ 無理！ 無理だよそんなのッ！？」

空気を震わせえるような大声に威嚇されたのかぶに達が怯む。横目にアレアスはほくそ笑んだ。

「そうか。なら俺はここで棒立ちしていよう。間違いなく袋叩きにされるだろうが、それがトトリの指示なのなら仕方あるまい？」

「う、うっ……………」

ここで唸って黙り込むなら、以前のトトリそのままだ。だが、困難から目を背けず、自身を持って立ち向かえるのなら——。

「——や、やってみるけど……………け、怪我させたら……………ごめんね」

「上等だ。——では指示を。錬金術士殿^{れんきんじゅつし}」

「——うん！」

他でもない、トトウーリア・ヘルモルトが成長したという証だ。

「横によけて！」

指示に従い、トトリを空いている左手に抱えて飛ぶ。トトリは攻撃してきた相手を迎撃するような力は持っていない。ましてや回避も防御もままならない。

だがアレアスならそれが可能だ。少女が持ちえない事、出来ない事は全てアレアスに任せればいい。

そして少女がすべき事は即ち——“錬金術士”として出来る事に

他ならない――！

着地してすぐクラフトを投げ、一掃する。緑ぶにだけは倒し損ねたが、行動不能には追い込んでいる。

「残りは八匹だ。どうする」

周りに神経を集中させず、構えも取らず立っている。余分な緊張を与えない、アレアスなりの配慮だ。トトリは初めて、実戦で考えている。

様々な選択肢を生み出し、そして選択していく作業。ある意味人生にも似た経験を。

トトリは今、感じている事だろう。

「アレアスくん、後ろ居る？」

「いいや」

「行こっ！」

数瞬だけ、トトリの行動理由を考える時間を有した。

アレアスに防御を任せ、トトリは安全な遠距離からクラフトで殲滅する、と先入観が入っていたからだ。

破棄し、トトリの行動を読み切ったアレアスが内心で賞賛する。

「はっ、はっ、はっ！ けほっ――！」

しきりに周りを見て走っているトトリ。警戒しているのではなく、探しているかのよう。

足が絡まって倒れそうになったトトリを慌てて支え、背中におぶった。

「俺の方が早い。お前はお前にしか出来ない事を」

抵抗の言葉が出るより早く言う。

後ろにはぶに達が一斉にこちらへと飛び進んでいた。

「あつた！アレアスくん！ あつち！」

「ああ！」

巨大な木の根を飛び越え、着地と同時に根の影へ身を隠す。見失ったぶにが一斉に行動を止めたところを、トトリが投げるクラフトが襲いかかる。

弾けた棘がゼリーと共に散り、やがて静寂が場に戻ってくる。

「はあゝ……………なんとか出来た」

トトリが大きく息を吐き、根へともたれこむ。

「はしたないぞ」

「うわわっ！」

慌ててスカートを押さえて座り直す。運動して火照っていた頬の赤みが一層増した。

咎めるような目線を咳払いで誤魔化す。

「何はともあれ、ここまで出来るとは思わなかった」

「えへへ、でしょ？ …… ちょっと失敗しそうだったけど、アレアスくんがいるならなんとかなるかなって」

ネタ明かしをすると、トトリは最初の先制攻撃を覚えていたのだから真っ向から戦うという選択肢を全て捨てて一旦奇襲に適した隠れ場所を探したのだ。

「ただ、他にもあったよ、隠れる場所は」

「え？ どこに？」

頬に手を当てる。トトリの考え込む時の癖みたいなものだ。

答えずに上を指さす。示した先には太い枝があった。

「あ……………」

「連中はすばしっこいが、ジャンプ力はそうない。木へ登って一方的に殲滅する手も有効だし、奇襲に適した場所としても頭上は有効だった」

「そっかあ。 失敗しちゃったなあ…………」

「ま、そこは経験の違いだな。後はそう。自分に出来ない事を自分でやろうとしたのは頂けなかった。一旦下がった時も、おまえをおぶらないと見つける前に追いつかれていたからな」

素直に意見へ耳を傾け、ため息を吐いた。

「上手くできたと思ってたけど、だめだめだね私……」

「いいや。何事も経験だ。錬金術だって失敗はしているが、成功もしているだろう？ 積み重ねて実力を着々と付けていけばいい。トトリなりのやり方で」

立ち上がって手を差し出す。

「——ありがとう」

トトリは最高の笑顔でその手を握り返してくれた。

今回はトトリの成長を見るだけでなく、見回りとしてもかなり得るものがあつた。それはぷにの行動である。

以前のぷになら相手が逃げると、まず追ってくる事はなかった。最弱の魔物が数が居るとしても人間を追撃するなんて、まず有り得ない。

それだけするには相応の理由がなければならない。奇襲される前の鬼気迫る探し方にも違和感を覚えた。

——やはり今回の問題は、簡単に済ませて良いものではなさそうだ。

「トトリ、クラフトの残りはあるか？」

帰り道。家へ続く坂を上る途中で尋ねた。

「え？ ううん。もう使い切っちゃったけど……どうして」

「なら正式に“仕事”で頼みたい」

「え？ アレアスくんが、私に……？」

「ああ。もちろん報酬は払おう。構わないか」

「うん！ いいよ！ でも、お金なんていらないから」

「労働力に見合うだけの報酬を得るのは当たり前だ。お前は知り合いだからって無償で助けるつもりか？ それは感心しないぞ？」

お金を取らない事は相手の不信に繋がる。無償で助けるのはただの自己満足で、誰も良く思わない。

「うーん……じゃあ、お願い聞いてもらっていい？」

暫く考え込んだトトリ。やがて神妙な顔でそう言った。

アレアスは嫌な予感がしたが、それでも「構わない」と、返事を返す。

深呼吸して覚悟がついたのか、はつきりと最後まで言い切った。

「私も、アレアスくんのお仕事してみたいんだけど、いいかな？」

第五話

「面白い冗談だ」

「……冗談じゃなくて、本気だよアレアスくん」

「冗談ではない。トトリはそんな冗談を言う性格ではないという事はよく解っている。だがそれでも、尋ねずにはいらなかった。」

「トトリ。お前の仕事は頼まれた物品をアトリエで調合する事、そうではなかったか？ そっちの仕事はどうする？」

「……えっと……しばらくお休みしても」

「却下だ馬鹿者」

拳骨が頭に落ちる。目を潤ませたトトリが頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「うつ……凄く痛い……」

「痛みを感じるといふ事は頭が正常な証拠だ。良かったじゃないか。」

——で、もう一度聞くんが、アトリエの仕事はどうする？」

「か、掛持ちとか……どうかな？」

「自身の実力を鑑みてものを言え大馬鹿者」

拳骨で挟んだトトリの頭にグリグリを決める。威力はそれほどもないのかトトリが悲鳴を上げ始めた。

「じゃ、じゃあどうしたら怒らないの？」

半ば涙声で尋ねられる。アレアスは解放してから欄干に腰を下ろす。

「おまえが何にも考えず、馬鹿な事を口走るからだ。

勿論、お前が俺を手伝うというのも馬鹿らしい話ではあるが、そっちよりも尚悪い。

——いいか？ 人同士が協力し合うという事は、相手と共にあるという事だ。

もしお前が何も周りを考えず動き回ってみろ、お前は自業自得で咎を負う事になるが、あずかり知らない相手方は堪ったもんじゃない。

自分勝手が許されるのは、自分だけに還ってくる責任までだ。人を巻き込むんじゃない」

「それは……………ごめんなさい」

反論を飲み込んでトトリが謝罪する。しかし目は諦めてはいないようで立ち上がるとアレアスにまた近づく。

「でも！ 私だってやってみたい！ アレアスくんみたいに上手く出来ないかもしれないけど、何もしないままじゃ、ずっと何も出来

ないまま終わっちゃうから……」

「——心意気は汲む。今回は無理だが、別の機会を設けよう」

「アレアスくん！ それじゃダメなの！」

立ち去ろうとしたアレアスの肩を掴む。——トトリは気づいていないようだが、今のはあぶなかった。

あと数瞬踏ん張るのが遅かったら崖から真っ逆さまに落ちていた。屋根への頭からの着地は遠慮したい。

「アレアスくん、さっき言ってたよね？ 『私に出来ること』を——って」

「ああ」

「私はもつともつと錬金術を勉強したい。それで、世界中の見たことない場所に行ってみたい」

「——そうか」

目を伏せ、脳内の処理に専念する。

トトリの覚悟は“本物”だ。これだけの意志なら、傍に置いても仕事の邪魔にはならない。

そして、トトリの経験を養う事は、他でもない恩返しにも繋がる。

だが——今、アレアスは冒険者^{マリカ}と手を組んでいる。長く冒険者

免許を持たないアレアスに代わって依頼を手伝ってくれた、

ヘルモルト家とは別の意味での恩人だ。

トトリと組む事は即ち、あの少女にとって足手纏いを引き入れる事ではない。

アレアスとて逆の立場で、仕事を素人に手伝わせるなんて聞かされた日には卓を蹴り飛ばす自信がある。

そんな妄言を口にするなら——間違はなく、コンビ解消に発展するだろう。

……あまりに大きいデメリットだ。今後にも大きく支障が出る。

だが——それでも、最初の目的は一つだけだ。悩むまでもない。

「いいだろう。ただし、俺は今の仕事を破棄する。新しい仕事は……そうだな、アトリエの主人の護衛なんてどうだ？」

「え……？ えっと……どういう言う事」

「——つまりだ。なんでも屋が捨てた仕事を、アトリエの主たるお前が拾って仕事とするかどうかは自由という事だ。俺はお前の護衛として、手を貸そう」

「それって……私が仕事を受けたら、アレアスくんも手伝ってくれるって事だよね？」

「そういう事だ。——それに、アランヤ村で頼りにされている“なんでも屋”が達成出来なかった仕事をアトリエの無銘鍊金術士がやり遂げたなんて、

素晴らしいハクがつくだろう。今後のお前の働き次第では、沢山の得るものがある筈だ」

アレアスが“なんでも屋”を始めたのはあくまでヘルモルト家への“恩返し”。よって、何があっても目的からずれた道を選ぶ筈などない。

業績の評判が下そうとも、マリカから失望されようとも——トトリの成長への礎に利用するだけだ。

「ほんとに……いいの？」

未だに信じられないのか、呆然とした声で訊いてくる。

「嘘は言わないさ。なんなら誓約書でも書こうか」

「やっつったー！ー！ アレアスくんっ！ ありがとうー！ー」

「待て！ 落ちる！ 落ちるから！ 落ち着け！ 落ち着いて……」

「あ……！」

想像を超える力に耐えられず、トトリに抱きつかれたアレアスの体が傾き、欄干から離れそうになる。

慌ててトトリを突き飛ばそうとしたが、引き剥がすのにも時間が足りなかった。

「きゃああああああっ！！！」

耳に響くけたたましいトトリの悲鳴と共に崖下に投げ出された。

先程とは逆に、トトリの腰へ手を回し、放さないよう頭を押さえると、回転しながら落ちていく。

遠心力を利用し、何度も修正を加えて体のバランスを整えると、足から家の屋根に着地した。

アランヤ村特有の製法で作られている屋根が鈍い音を立てて軋み、衝撃に耐え切れず破損した破片がいくつも軒下へ転がっていく。

「——なんだろうな。トトリと関わると俺は間違いなく、ロクな目に合わない気がする」

ぼつりと呟いた予言と口うるさいおばさんが乱暴に扉を開けるのは同時だった。

アレアスが酒場の扉をくぐったのはすっかり日が沈んだ頃だった。営業盛りの時間帯だというのに客はまばらに座り、空席が目立っている。

だが何よりも、ずっと待ちぼうけを食らっていたマリカの席へ目を向けた。相変わらずコーヒを一杯注文しただけで座っている。

無駄な動作がない少女の座る姿勢は、美しい肖像のようにも見える。

傍まで歩み寄ると、閉じられていた双眸がゆっくりと開かれた。

「ずいぶん遅刻したわね。今まで定時に来ていた分の貯金で封殺したとしても、許容出来る範囲にはならないわよ」

定時の時間から大よそ3時間も遅れている。確かに、どんな理由があつたにせよ許されるものではない。

「——すまない」

体面に座つてすぐ頭を下げる。額をテーブルに付けて謝罪の意を示した。

遅刻の意味と——そして。後にする話の事でも。

「……頭をあげて。——別に怒っていないから」

湯気もあがらなくなったコーヒを眉一つ動かさずに飲む。一口だけだったのかすぐカップを皿へ戻した。

見定めるような視線と交差する。感づかれたかとアレアスは臍を噛む。ほそ

マリカは中々手強い。大抵の隠し事は見抜かれるし、頭も切れる。

アレアスとてそれは理解した上で、注意を払っていた。にも拘らず、結果はこの有様だ。

「今日は重要な情報を仕入れたのだけれど……貴方はもつと重要な用事がありそうね。——私に関係あるかしら？」

「——ああ。今後を左右する程にはな」

「じゃあ言つて」

アレアスに躊躇いは無かった。

“なんでも屋”を始める前——まだアレアスが村に馴染めておらず、一人で居る事の多かつた時間ときからの知り合い。

おそらく、自身にとっては“親友”と呼べるに値する仲の少女だと確信している。

けれど切り捨てる事に躊躇いはない。後悔もない。——胸を締め付ける“何か”は別として——。

「マリカ。俺は、今後お前と手を組むつもりはない」

まるでマリカに咎があるかのような言い方だ。釈然としない感情が脳裏を焦がし始める。

煮えたぎるような熱さにやられそうなアレアスと対照的に、マリカは氷のように冷やかで、表情を崩す事すらなかった。

「そう言われたなら——私も言つべき事は一つなのでしょうけど

——その前に確認していいかしら？」

何を何て野暮を返すつもりはない。問いが何を意図しているかなぞ火を見るより明らかだ。

「お前に悪い所はない。……ただ、俺はトトリと手を組むことにした」

「あの子と？」

「そうだ。トトリは今でこそ弱いし情けないが……努力で経験さえ補えば十分高みに登れる。」

それに、錬金術という、この大陸で三人しか扱えない技術体系を扱える大きなアドバンテージまである。

——眠らせるには惜しい才だと……俺は思う」

「そう。その為に貴方自身の全てを捨てると？」

「それが必要なことなら——」

「——過去の記憶が殆ど欠落した貴方にとって、今の貴方が築き上げた関係は掛け替えのないものだと思うけれど——それも……捨てるの？」

「躊躇いもしないし、後悔もしない」

自問自答しているかのような錯覚。アレアスは齒を食いしばってマリカの視線を受け止め、迷いなく答えてみせた。

一秒が体感的に長く感じる。先に目を逸らしたのはマリカだった。

「貴方がそう決めたのなら、それで構わない。……ただ、それでどうして私が仲間外れにされるのか、納得は出来ないけれど？」

「——何？」

耳から聞こえる言葉を疑ったのは今日だけで二回目だ。マリカが分からない筈はない。

今回の仕事は、普段アレアスが受けているギルドの討伐依頼よりも難度が高く、そして危険なものだ。

そこに戦力の低下を招く要因が僅かでも混じる事があれば、容認してはならない。事情はどうであれ、だ。

アレアスは優先順位の違いにより“事情”を優先させたが、マリカはそうまでする“理由”がない。

「俺の聞き間違いじゃなければ、マリカ……それはトトリと組むのを認めると言っているようなものだが……？」

「——ええ、そうよ。貴方はどうか知らないけど、人に勝手な憶測を押し付けないで。私は私の考えで行動するわ。決めるのは貴方じゃない」

「それは——そうだが……理解に苦しむな。マリカはどうしてトトリに手を貸す？ 一度も会った事ない間柄だろう？」

「――」

一瞬だけ、歯を食いしばるような音が耳に届いた。アレアスは顔を訝しめるが、マリカは表面上の変化が見られなかった。

「ええ。でも貴方がそう口上を並べられるのなら、信頼に値するわ。――未来への投資くらい、安いものよ」

「――そうか。ありがとう」

他意は無いと判断したアレアスは一息つく。今日は驚きの連続だ。正直、帰って休みたい。

緩む空気と一緒にポケットの中のモノを差し出した。

「これも……ありがとうな。助かったよ」

差し出したハンカチを心底驚いたように見つめる。何故かは理解できないが、マリカは今、本当に驚いていた。

「どうして……今これを？」

震える声には恐怖が混じっている気がして、アレアスはマリカの豹変に内心で戸惑った。

「あ、ああ……忘れてたんだ。さっきまで」

自分自身でも気が張っていたのか、早起きして洗濯したハンカチの存在を忘れるとは信じ難かった。

そもそもアレアスは忘れゴトなどしたのは今回で初めてだ。少し真新しい気分もある。

しかしマリカは震える手でハンカチを取ると席を立った。

「――用事を思いだしたわ」

それだけ残して足早に酒場を出ていき、止めようとしたアレアスは間に合いすらなかった。

「ふむ……珍しいな。どうしたアレアス。マリカと何かあったのか？」

マスター・ゲラルドの言葉には答えられなかった。アレアスもまた、マリカの戸惑った姿を初めてみたからである。

帰路についても、疑問は蟠りとして胸に残ったままだった。

第六話

数十時間ぶりに動くのをやめたアレアスは汚れた作業用手袋を脱ぎ捨てると修復作業が終わった屋根の上に座った。

心地の良い疲れが体を叩き、休むよう訴えてくる。

「もう朝だったのか」

空はすっかり明るくなって暖かい日差しが差しはじめていた。

アレアスが一晚掛けてしたのは、昨夜トトリと共に落ちて破損させてしまった屋根の修復作業だけではない。

了承を得て、修復のみならず傷んでいた部分の補強をして、煙突の煤払いから屋根の掃除まで、徹底して行った。

仕事病なのかもしれないが、どうも半端に終わらせるのは性に合わない。

アランヤ村は地方特有の温暖もあって夜もそう冷え込まない。悪影響は睡眠不足という程度なのだが……もしツェツィにこの件がバレたら洒落にならない。

問答無用でお説教タイム突入となってしまう。

「アレアス坊や」

「なんだ」

屋根から飛び降りる。仏頂面のおばさんがスープの入ったカップを差し出してきた。

「これをお飲みねえ」

「ありがとう」

礼を言って受け取り、丁度よい温かさのスープを飲む。味はお世辞にも美味いとはいえないが、それでも味わって飲み干した。

「すっかり治したかえ？」

頭を下げてコップをトレイに戻し、おばさんがトレイを扉の近くにある棚へと乗せる。

「勿論。もう子供が落ちても壊れたりしないさ」

「いつひっひつ。そうだと良いがねえ」

冗談に笑いを返して、屋根に掛けた梯子を上っていく。念のためにアレアスも後に続いた。

「おやまあ。すっかり綺麗になって」

完全に腐りきっていた部分を撤去して新しくしているのだから当然だ。

アレアスは賛辞を聞く事無く道具を纏め始めた。

「こんなにして貰えるのなら、次も落ちてきて欲しいものだよ」

「トトリに頼んでくれ。それが“なんでも屋”に依頼してくれればいい。まだ営業を続けていたなら更に満足させる仕事をしてみせよう」

虎視眈々と挑戦的な笑みを浮かべて言ってみせた。

「そうかい。楽しみにしているよ」

道具を布で縛り終え、肩に担ぐ。おばさんが溜息をついて口を開いた。

「そういえば、いつだったか。剣を持った子が上から落ちてきてねえ。謝りもしないで逃げてくもんだから、あたしも旦那も怒ったもんさ」

（お前か——！！！！）
ジーノ

内心叫んだ。本気でジーノに対して怒りを感じた。

骨組みにあつた不自然な亀裂と下手くそな修復で隠されただけの穴。それこそ、アレアスが予想以上に時間を浪費した原因なのだ。

間接的にジーノの尻拭いまでさせられた事になる。あの能天気な笑顔にいつそ石を全力投球してやろうか。

ぶっそんな事を考え始めた内心とは関係なく、笑顔を繕って別れを告げると、さっさと家に戻った。

×

×

×

真つ暗な視界が一面の光へ変わった。あまりの眩しさに手で目を覆い隠す。

閉じられていたカーテンを開いた者が呟く。

「マリカ様。いくら夜遊びが好きでも、そろそろ起きませんと……今何時だと思いですか？」

「——お昼前……かしら」

「正解でございます。しかしマリカ様のご起床は毎朝5時と決まっているではありませんか」

「——決めた覚えはないわね」

トレイの飲み物を取って一気に飲み干す。サイドテーブルに置く
とベットから抜け出した。

黒のインナーシャツとスカートはすっかり皺だらけになっていた。

乱雑に椅子に放り投げられただけの上着も見ると執事が咎めるような目つきで口を引き絞った。

「今朝は一段とご加減がよろしく無いようですね？　いかがなさいましたか？」

マリカは普段、非常に凡帳面である。だが、今回ばかりはそんな体裁を繕っている余裕なんて無かった。

八つ当たりでも現実逃避でも構わない。精神的な落ち着きさえ取り戻せばなんだって構わなかった。

執事の言葉には答えずインナーシャツを脱ぎ、適当に用意されている私服に着替える。

机の上に置かれたハンカチを見て、また動きを止める。

何のことはないハンカチだ。マリカが生まれて始めて貰った誕生日のプレゼントだという事を除けばだが。

「ハンカチが……どうかされましたか？」

「アレアス……彼に貸していたものよ。——でも……彼は忘れていた、ハンカチの事をね」

普通の人が忘れ物をするのなら、単なる笑い話程度で済ませるが、アレアスなら、全く笑えない。

微かな最悪の可能性を示唆するものと勘ぐったのか、執事の目

が見開かれる。

「誠にございますか！？ まさか……では……」

「ええ。……もしそうなら、覚悟はしておくことね」

右手を強く握りしめる。ハンカチにやがて染みが浸透し始めた。

「…………… 今後は、どうするつもりですか？」

「予定を繰り上げる。頼んでおいたものは？」

「既に」

ハンカチを投げ渡して本棚に近づく。きちんと整頓された本の中から左寄りにある題が『Dark World』となっている本を半ばまで押す。

ガコツ、と何かが作動した音と共に本棚が扉のように開いていく。真つ暗な闇の世界が、主を招き入れるように通路左右の炎を灯していく。あかり

地下へと続く階段が見えた。歩きなれた道をマリカは躊躇わず踏み入る。執事も後を追ってきた。

薄暗くて臭う土の匂い。更に地下特有の息苦しさ。土から流れ出た水の音と歩く音だけが聞こえる通路の先に、扉が三つ並んでいた。

中央の扉は避け、右側の扉を開く。両端には様々な用途で扱う、アーランドの機械技術を約二世代ほど先取りしたオーバーテクノロジー

ジー達が鎮座している。

これをバラまけば機械技術が飛躍的な進化を遂げ、マリカの名は後代にまで語り継がれるだろうが、それはあくまでマリカが此処に並んでいる物の開発者であれば、だ。

実際のところ、マリカが知るのは扱いのみであり、万が一壊れたりしても直しようがない。——これを作り出した悪魔の才を持つ者は、今居ないのだから。

「マリカ様？」

「なんでもないわ。目障りなゴミが目についただけ」

「何をおっしゃいます。ここにあるものは全て、クラディウス家の財産なのです。ここにある全ての機材には莫大な知識が詰まっているのですよ？」

「……………」

髪をかきあげて足を速める。執事も何も言う事は無かった。

突き当りで足を止める。ガラスケースで保管されているのは黒い光沢を放っている銃だ。アーランドで機械技術が発展してからは銃は珍しいものではない。

銃の歴史は浅いが、射撃の使い手は既に存在し、有名なところとなっている。

クーデリアは銃の中でも威力が低く、女性には扱うことが困難な

デリンジャーを使ってドラゴンを倒した経歴もあるそうだ。

だが——当然この館で製造されている銃は全く構造から出来が違う。

弾丸には口径の大きいもの、そして木弾ではなく金属で製造された弾丸を使用する。

正に次世代の銃と言って差支えない。

「現状で最高の素材で製作致しました。銃の威力は現在出回っている銃の約12・6倍程と演算されています。ただ……」

マリカは分解されている小型拳銃を組み立てながら耳を傾ける。

「今の素材では排熱処理が厳しい構造となっております。あまり無駄撃ちすると銃身が壊れかねません。どうか、短期決戦の戦いを心掛けられますよう」

「その必要はないわね。それより、これに自爆機能を付けられるかしら?」

「…………製作費用はおわかりで?」

「ええ。私が稼いだお金を製作費に当てているから、問題はないわね」

「使い捨てになどすれば、いくらマリカ様の備蓄があっても足りません! どうか、お考え直しを!」

「大丈夫よ。どのみち作って貰うのはこれが最後だもの」

「……………」

意図が不鮮明で首を傾げる執事を放って次の銃に手を伸ばす。

「それにも自爆機能を？」

「全ての銃によ。こんなものが大陸に出回らないよう。技術の痕跡を僅かも残さないようにしないと」

「それは——おっしゃる通りです。わかりました、全てに自爆機能を付けましょう。——しかし、膨大なコスト問題はどうか致しましょう？」

少し考えて身に着けているペンダントを見せる。

「この副次効果を流用する。そうすればコストも、弾数さえ問題にならない。完成した銃はケースに戻しておいて。今日中にね」

「忙しくなりそうですな」

通路に出ると扉が独りでに閉まり、道の一步後ろの明かりが消えていく。まるで闇に追われているようだ。

地下から戻ってくるとすっかり昼過ぎになっていた。

「私はこれから彼のところへ行くわ」
アレアス

「アレアス様のところへですか。その恰好で？」

「何か問題でも？」

マリカの私服は最高級の布地を上品に仕立て上げたもので、誰が見ても村娘の恰好ではないと分かる。

だが、誰が見ても目を奪われてしまうほど、可愛らしかった。

執事は笑みを浮かべる。

「さぞかしアレアス様も目を奪われることでしょう。これを機に衣替えなどはいかがです？」

「ありがた迷惑よ。さつさと予備を持ってきて」

「――残念でございます」

椅子にひっかけられていた上着が、無造作に執事の顔へぶつ附れた。

×

×

×

「トトリちゃん、そろそろご飯だからアレアス君呼んできてくれる？」

「え？ アレアスくんが居ないの？ めずらしいね」

「朝から部屋に居るみたいよ。—— なにかあったのかしら」

（うーん…… 思い当たらないこともないけど……… おねえちゃんに言っただけかな）

しばらく考えたが、やっぱり言わないことにした。

トトリは外に出て階段を上り、二階に入って突き当りの扉をノックする。アレアスの部屋から返事が無かった。

「アレアスくん？」

「—— すまない、調査中だ。用事なら後にしてくれ」

「へー。—— え？ ちょう……ごう……？ 錬金術で！？ アレアスくん、錬金術使えたの！？」

ドンドンと扉を叩く。やがて乱暴に扉が開かれて床に尻餅をついた。

「俺が使えるわけないだろう。気になるなら入れ。うるさくて作業の邪魔だ」

ぶっきらぼうに言って戻っていく。アレアスを追って部屋に入る。相変わらず、趣味が無いアレアスらしい無機質な部屋だ。

ベットや棚、そして机といった最低限の物しか置かれていない。ただ、机の上にはトトリの見たことがある試験管、フラスコ、ビーカーが置かれている。

もちろん、トトリのものではない。

「アレアスくん、こんなの持ってた？」

「ああ。大抵調合する時は寝る前だったから、お前が目になかったのも無理はない」

忙しなく動き回って棚から薬品を色々とり出して机に並べていく。

そのうちの一つを取ってみるとラベルに『アルミニウム』と書かれていた。

「これをどうするの？」

「簡単な爆弾を作るのさ。——まあ威力ゼロのあげく、薬品を大量に使う事になるから量産はきかないが」

「アラ^ニンヤ村に薬品なんて、あんまり売ってないもんね」

「そうだな。行商が来た時くらいか。それでも滅多に売る奴はいないが」

試験管立てから取り出さず、試験管に適量に分配した薬品を容れる。三脚で固定されたフラスコに熱を加えて、皿に盛った粉末をか

き混ぜる。

「……………」

「——あ」

「なんだ。言いたい事があるならさっさと言え」

「えっと……………もう遅い……………かも」

「—————」

二人はゆつくりと覚悟を決めて振り返る。そこには満面の笑みを
浮かべた悪魔^{ツエツイ}が立っていた

第六話（後書き）

おまけ『Dark World』

この物語は本編と関連のある物語ではありませんが、見なくても影響はありません。

漂流者は“あなた”です。

“あなた”に許される行動は一つ。

少女と言葉を交わす事

もし、少女に聞きたい事があるのなら、躊躇わず尋ねるといいでしょう。

それが——やがては……

「——いらっしやい、不法侵入者さん。早速だけど、ここがどこかわかる？」

時代錯誤な灯が両壁に沿って設置され、下には途方もない数の用途が不明な器械が並んでいる。

自分が立っていたのも変な柱が立ち並ぶ器械の中心だった。

首を振る。少女は注意深く観察するような目で一瞥し、手にしていた何かを仕舞った。

「そう。なら“次元漂流者”ね。珍しい事ではないけれど、来るなら時と場合を選んで欲しいものね」

まったく少女の言っている事が分からなかった。尋ねてみるとキチンと返してくれた。

「あなたはね、別の世界から来たのよ。私の知らない世界からね。帰りたいなら此处で立ってればいいわ。いずれ貴方の体はこの世界から弾きだされて強制送還されるから」

どうしてこんな場所に来てしまったのか。尋ねる。

「ここは時空の歪みが局所的に起きる“忌み土地”よ。この機械は時空の歪みを修正して別の世界と繋ぎ合わせる為のものなの」

変な柱を少女が差した。よく見ると柱にはめられている無数の蒼い石が淡い光を放っている。

「ただ、おろかもの製作者が電源を切り忘れててね。ずっとこの状態で放置されて続けているの。貴方みたいな人が迷い込んでくるのも珍しい事ではないわ」

迷惑な話だ。ならこっちは無関係なのに面倒に巻き込まれたという事になる。

「でしょうね」

他人事のように言う。迷惑をかけているというのに白々しい態度だ。

「私が貴方に迷惑を？ 貴方がそう考えるのなら言わせてもらうけど、私には貴方の戯言と境遇に付き合っただけで理由もないのよ。これを作った者と私には何の関係もないもの。言うなれば赤の他人そんな相手の不始末で、私が何癖つけられるのはどうしてなの？」

せめて電源を落とすくらいは……

「——言っただけでしょう。この機械は世界を繋ぎ合わせる物と。

今現在、この機械は次元を安定させているのよ？ そんな状態で電源を落としてみなさい、次元が不安定に暴走して繋がってる世界全てが吹き飛んでもおかしくないわ。——試してみる？」

ぶんぶん首を振って慌てて拒否する。

「知らないから何でも許されるのは“子供”までよ。“大人”は無知が罪になる。私より年が上なら、それらしい行動と考えを持つことね」

それだけ言っただけ少女は立ち去ろうとする。慌てて呼び止めると最後に一言だけ返してくれた。

「私には電源を落とすことは無理よ。その機械は常識から逸脱しているもの」

さようなら。もう会う事はないでしょう。耳に届いた途端、足、手が消えていく。声を出そうとしたが出なかった。

せめて最後に口だけ動かした。

伝えたのは謝罪の言葉。少女の眉一つ動かないので届いたのか定かではないし、今後もおそらく知る事はないだろう――。

――この断片を削除しますか？

Y
e
s

o
r

N
o

短編「闇に舞う少女」(前書き)

10,000PV突破記念として開帳された短編です。

これはプロローグから二年ほど前の物語における断片となります。

短編「闇に舞う少女」

冒険者になって3ヶ月。

少女——マリカ・クラディウスは知名度とランクを順調に伸ばしていた。

曰く、少女の受けた仕事に失敗はあらず、どんな依頼であろうと数日で完遂させる——。

そんな噂である。酒の肴に耳を傾けていた男は声高に笑った。

体格の良い大男でボロキレのような服とも呼べない格好をした男。汚らしい肌には無数の傷跡がある。

大男はあぐらを掻いて目の前に座る男たちに言った。

「ただのガキだろ？ しかも年場もいかねえな。どちらにせよ、俺たち“サンチヨ山賊団”に敵はねーよ」

「さっすつが頭！ オレ、ずっとついていきやすよ！」

子分のひよろひよとした男の言葉に続いて歓声上がる。

リーダーのサンチヨはまたげらげらと笑った。

“サンチヨ山賊団”の自信は、二日前に撃退した冒険者たちからだ。十人は居た冒険者たちを全員返り討ちにして叩きのめしたのである。

中には多少有名になった奴もいた。だが、数の暴力の前になすすべもなく敗れた。

こっちは68人なのだ。山賊の規模でもここまでデカイ規模はこの“サンチヨ山賊団”だけだ。

自信と力を身に付けたサンチヨは笑い続ける。

——その笑みが今日をもって終わらされるとも知らないで……

宴会が更に盛り上がりを見せていた。だが突然の侵入者に全員が息を呑んだ。

上から降ってきて、広場の中央に降りたのは漆黒のコートに身を包んだ人らしきものだった。わずかに革製の茶靴が見える程度で顔もフードで覆われている。

「なんだあテメエは!？」

男たちが地面に置いていた剣や槍を持って威嚇する。サンチヨは正面から余裕たつぷりに人影を見ていた。

フードの正面には顔が見えた。まるで人形のように、生きた芸術品のような美麗な顔が。

「おまえは？」

「冒険者よ」

予め用意されていた回答を言っているかのように人気の無い言葉だった。

サンチヨは下品に喉を鳴らして体を起こす。椅子を持ち上げて無造作に放り投げた。

椅子は洞窟の土壁に当たって粉々に砕け落ちる。

「おいおまえら、こいつは女だ！ 丁重に迎えてやりな！」

それだけ言うと円になっていた八人の男たちが一斉に少女に掴みかかり、両腕を掴んで膝で立たせる。

「なんだよ、冒険者なんだろう、味気ねえよな」

「まあいいじゃねえか。さっさと取るもの取って遊ぼうぜ」

フードに手を掛ける男。次の瞬間——轟音が洞窟を揺らした。

サンチヨが咄嗟に閉じた目を開ける中心の地面は真っ黒に変色し、少女に掴みかかっていた男たちは椅子と同じように壁に叩きつけられていた。

そしてもう一度、上から、今度はサンチヨの真後ろに降りた影があった。

「爆弾を抱きしめるなんて、貴方たち気は確か？」

声は先程より美しく、背筋が寒くなるような恐怖がサンチヨにはあった。

自信を凍りつかせ、そして彼自身をも闇へと葬り去るような化け物にあつたかのように汗が噴き出し始めた。

怒りよりも恐怖。

——背中に居る誰かは危険だ——！ はやく逃げないと——！

サンチヨはすぐに走り出して、背中を庇うようにまた男たちが立った。今度は13人。

振り返った先に居たのは、あの時に見た、コートを羽織った少女だった。

「お、お前ら！ やれ、やれーっ！」

サンチヨの言葉に一人の男が剣で斬りかかる。粗い太刀筋で品の欠片もないテキトウな構えから放たれた一撃。

少女は身を捻って躲し、カウンターで脛を蹴った。骨の折れる不快な音と悲鳴が上がる。

油断のならない相手だと事此处に至って理解したのか、全員がじりじりと慎重に構えていた。

少女が未だ呻く男の傍に落ちていた剣を拾いあげる。刃こぼれだらけの今にも折れそうな剣だ。

右手に剣を持ったまま、ゆつくりと男たちに近づいてく。

剣先が地面をこすって線を描く。男たちには剣を持った死神に見えた。

何人か、恐怖のあまり出口へ奔って逃亡を図ろうとしたが、松明が倒されて真つ暗な闇から伸びてきた何かが男たちの足に絡まった。そして悲鳴と共に闇に引き摺られて消えていく。

「う、うわあああああああ！」

半狂乱で斬りかかったサンチヨの手下は全員、容易く切り結ばれて地面に転がされる。重症だが、致命傷には至らない、巧いさじ加減のされた技だ。

しかしサンチヨにはもう全員が死神に喰われたようにしかみえなかった。

「くるな、くるな、くるなあっ！」

屍餅をついて地面を這うように後ろに下がっていく。新鮮な血液の付着した剣から血が垂れていた。

「かねならいくらでもやる！ なんでもいつとききますから！ たすけてください！」

恥もなく言つて足に掴みかかろうとするが、肩に深々と剣が突き刺さった。

「ぎああああああつ！」

倒れて悲鳴をあげるサンチヨ。足に鎖のようなものが巻き付いた。出口から逃げようとした男たちに使った“魔法の鎖”と呼ばれる道具だ。

少女はサンチヨを引きずりながら出口に向かい、夜の森に出た。木々の太い枝には足に巻き付いた鎖でぶら下げられている見知った部下たちの顔が並んでいる。

サンチヨもまた同じようにぶら下げられ、固定された。肩の剣が引き抜かれて痛みに悶えるサンチヨの髪が乱暴に掴まれる。

鎖が大きく揺れて、頭から落ちるのではと危惧したサンチヨは「やめてくれ！」と懇願した。

意にも介してないのか、聞こえていないのか、一枚の紙を取り出して目を通した。

「2年間にわたる近隣の村からの強奪行為、そして冒険者への暴行。厳罰を落とされても文句を言えないわね」

「違うんだ！ おれたちも生きるのに必死だったんだ！ 仕方がない事だったんだ！」

「そう。大変だったわね。これから、苦労するといいわ」

懐から“小型爆弾”のようなものを取り出し、いくつも地面に落とすと、最後に長い導火線のついた爆弾に火をつけて捨てた。

「あ、待つて！ やめろ！ やめてくれ！ たのむ！ おれはわるくないんだ！ やめろ！ やめろおおおおお！」

必死に呼びかけるも、少女は闇に紛れるように消え、数十秒後に爆発音が森へ木霊した。

×

×

×

「あんたさあ……もうちょっと加減できないの？ あれじゃ廃人同然じゃない」

「あれなら二度とあんな真似しないでしよう」

「まともな生活を送れるかも怪しいけどね」

はあ、と重たいため息を吐いてクーデリア・フォン・フォイエルバッハは少女——マリカ・クラディウスに向き直る。

年齢制限を排して冒険者になり、初仕事でドラゴン数10体の巣をたった一人で壊滅させるという偉業を成し遂げて一躍名を知らしめた少女。

今では冒険者のみならず、依頼者の間でもマリカを指名して依頼を回してることがあるくらいだ。

そして今回の依頼は、他でもないクーデリアがマリカに任せた依頼である。

滞りなく完遂してくれるのは信じて疑わなかったが、まさか山賊団全員に精神的なトラウマを植えつけられるとは思ってもみなかった。

まあ冒険者にも、沢山の村人にも犠牲が出ていた分、ただで済ますつもりはクーデリアもなかったが、これはさすがに同情を禁じ得ない。

「なんかさあ、あいつらに恨みでもあるわけ？ 流石にここまですることないんじゃない？」

「特にないわ。ただ、後の仕事で有利に働くよう、そうしただけ」

「はあ？ わけわかんないわ」

「噂は人々の間に勝手に回るものよ。——もちろん、他の愚か者たちにも。そして今回の騒動を引き起こした私と対峙した時、彼らはどんな反応を見せると思う？」

だいたい予想はつく。ある者は恐怖によって逃走し、ある者は畏縮してしまう。

たった一人で多数を相手にし続ける少女には、相手に自分を大きく見せられるという事は、この上ない優位点アドバンテージなのだろう。

——伊達に、異例ではないという事か。

「ふうん……考えてるのね。ならいいわ。許してあげる」

「別にあなたに許される必要もないけど」

「——いちいちカチンとくる言い方しか出来ないやつねえ……あんた」

クーデリアの視線を躲して颯爽と黒髪を散らして冒険者ギルドの出口に去っていく。

背中には全く隙が無く、全てを拒絶しているかのような、少女の影が浮かんでいた。

短編「闇に舞う少女」（後書き）

ちなみに蛇足ですが、一部の外で見張りをしていたものについては、冒頭の段階でマリカの手により倒されています。

数が減っているのは宴会に呼ばれていない見張りをしていた分ということになりますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6654v/>

トトリのアトリエ ～トトリと宿命の担い手～

2011年11月22日14時37分発行